大変に貴重な霧ケ峰の草原

長野環境人士　自然に優しく、暮らしを楽しく

対談　小林光さん　山本勝之さん

小林光さん 73

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー（環境分野）

山本勝之さん 64

ペンション・ファーブル（原村第2ペンションビレッジ）オーナー

3歳から夏は奥多摩

体験学習も行う塾

小林　東京生まれ、浅草育ちの山本さんがこれほど虫好きになったきっかけは。

山本　父親が小間物職人でした。夏休みに子どもが家にいると、仕事に差し支えがあったのかもしれません。3歳の頃から夏は奥多摩に滞在するのが恒例でした。奥多摩で遊びといえば川と虫。小学生の時にチョウを採っていたら、見知らぬ中年の男性から「何を採っているの」と聞かれましてね、「サカハチチョウ」と答えると、驚かれました。その男性は実は高校の生物の先生。仲良くなり、データの取り方などを教えてもらいました。

小林　その後は。

山本　大学生在学中に学習塾を創業し、卒業後も経営を続けましたが、浅草は不動産会社が事業用地の確保に向けて土地を買い付ける動きが活発になり始めた頃でした。土地を売って別の地域に移る人が増え、地元の子どもは一気に減少。塾をたたみました。

小林　学習塾の特色は。

山本　塾では勉強を教えるだけでなく、キャンプやスキーなど体験学習も採り入れていました。それもあって、塾経営の後は、大手食品会社が運営するクラブで昆虫採集の講師を務めました。4泊5日で県外での学習旅行を実施。富士見町にも来ましたよ。そうした中で知人の紹介があり、1991年に原村のペンションビレッジに移り住むことになりました。

虫三昧の企画人気

小林　私はチョウが大好きなので少しチョウの話も聞きたいのですが、こちらに来られたばかりの頃、チョウは多くいましたか。

山本　いましたね。例えばミヤマシロチョウ。現在の八ケ岳中央農業実践大学校近くや八ケ岳自然文化園から山側の別荘地でも見られました。

小林　なぜいなくなってしまったのですか。

山本　シカが増えた影響があります。ミヤマシロチョウは餌となる低木の葉に卵を産みますが、シカがその葉を卵ごと食べてしまうことが増えました。原っぱがなくなったこともあります。ペンションを始めた当時、ここは樹高が低く、草原性の昆虫が多く見られたのですが、徐々に環境が変わり、いつの間にか樹林性の昆虫が中心となりました。

小林　ペンションを経営してからも昆虫見学の企画は続けていますか。

山本　はい。樹液に来ている虫を探す企画は、現地に行くと、カブトムシだけでなくいろいろな虫が見られます。そんな虫三昧の企画が人気です。虫嫌いだと言っていたお母さんがいつの間にかはまってしまうこともありますよ。

原村にペンションを開き、30年余。人と自然のかかわり方について植物や昆虫の視点から語る山本さん㊨と小林さん＝5月30日

観光資源を守る環境整備をおろそかにせず

生き物は植物依存

小林　草原が森林へと徐々に変化をしていく。その時、生き物への影響は。

山本　生き物は植物に依存しているので環境に適した種類しか生息できません。原っぱであれば原っぱの生き物。森林になれば森林の生き物となり、原っぱの生き物は消えます。今、日本で一番危険なのは草原性の生き物です。ほぼほぼダメになっているように思います。霧ケ峰の草原は大変貴重です。

小林　霧ケ峰林野火災の見方はさまざまですが、生態系的にはいい影響をもたらした一面もあるのでしょうか。

山本　自然界でかく乱は絶対に必要です。林野火災はある種のかく乱でした。

小林　日本で減っている草原と関係がありそうですね。

山本　かつて牧草地だった場所は人が定期的に刈り取り、そこに草がまた生えてまた刈り取るというサイクルができていました。火入れを行ってきた地域もあります。そこには、その環境、サイクルに合った生き物がすんでいました。しかし、時代の変化で牧草地としての役割を終えた草原は森林になっていきます。霧ケ峰しか残っていないという昆虫もいます。生物多様性の観点からも霧ケ峰は昔からの環境を残さなければいけない場所ではないでしょうか。人間が自然の中にコンクリートを入れたのであれば、人間はその周りを含め、ずっと手を入れていけなければならないと思います。ものすごいスピードで極相林に向かっていき、草原性の生き物がいなくなります。

小林　チョウもですね。

山本　人間の手が入っていない自然では山の中で大雨により、土砂が流出し、自然発火による林野火災が起きてやがて消えたりします。そうして、モザイク状に森林があり、原っぱがある環境が生まれます。森林性の生き物も草原性の生き物も少しずつ生息場所を変えながら生きていくことができます。人間が手を入れる場合もモザイク状にさまざまな環境がある多様性を確保すべきです。一度手を入れた自然は放置してはいけないのです。

小林　親子が無理なく自然に親しめる。それは観光面から見ても面白い動きですね。

山本　観光は物見遊山から目的旅行へとシフトしているように感じています。昆虫は旅行者にとっての目的です。原村はペンションブームの先駆けとなった場所でペンションにベッドあるだけでお客さんが来た時代もありました。今とは全然違いますね。

ミヤマシロチョウ

小林　八ケ岳原村ミヤマシロチョウの会というグループがあるそうですね。

山本　96年からその会の会長をずっとやっています。保護活動と環境整備を続けてきましたが、残念ながら八ケ岳では絶滅してしまったのではないかとみています。

小林　ミヤマシロチョウは草原性のチョウですが、今は森林が育ち、生息しにくい環境ですよね。

山本　ミヤマシロチョウは以前、茅野市、原村、富士見町、北杜市小淵沢町の各保全地域にいました。ただ、すべて独立していて、茅野市の生息地から北杜市の生息地にかけての行き来ができない状況でした。保全地域を結ぶ生息条件が整った回廊みたいなものがあれば、今も見られたのではないかと思っています。

小林　先日、東御市のある場所に行ってきたのですが、ミヤマシロチョウが結構飛んでいました。でも採る人はなく、カメラで撮影する人が多かったです。ミヤマシロチョウの集客力はすごい。自然や環境を守ることは観光振興にもつながりますね。

山本　環境整備は観光資源を守ることでもあります。おろそかにしてはいけません。